

The Power of Re-Creations: A Consideration of the Interaction between Stories and Readers in J. R. R. Tolkien's Works

渡邊, 裕子

<https://hdl.handle.net/2324/4784372>

出版情報：九州大学, 2021, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）



氏名	渡邊 裕子			
論文名	The Power of Re-Creations: A Consideration of the Interaction between Stories and Readers in J. R. R. Tolkien's Works (再創造の力 : J. R. R. Tolkien 作品における物語と読者の相互作用に関する考察)			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	鵜飼 信光
	副査	九州大学	准教授	高野 泰志
	副査	九州大学	准教授	宮崎 海子
	副査	福岡女子大学	教授	宮川 美佐子

論文審査の結果の要旨

上記の論文は、英国の言語学者兼作家である J. R. R. トールキン (1892-1973) の作品における読者と物語の間の相互作用の性質を、「再創造」という観点から明らかにするものである。トールキンの研究は従来、彼が物語を作る際に元にした出典を特定し、その出典がどう改作されているかを考察する方法論と、架空の世界への逃避にも見られかねない物語を現代的な問題と結びつけて考察するテーマ論に二分される傾向があったが、本論文は、再創造というキーワードの下に、トールキン作品における物語の改作という方法と、現実世界の問題の再考というテーマの有機的結びつきを把握し、従来のトールキン研究の二つに分離されている動向を統合することに成功している。

序論、結論以外に五つの章から成る本論文の第1章は *The Hobbit*(1937) を考察し、ドワーフ族のドラゴン退治と祖国奪還の冒険に巻き込まれたホビット族の主人公 Bilbo が、ドワーフ族の叙事詩的価値観を批判から肯定へと捉え直すことでドワーフ族の物語を再創造するとともに、Bilbo 自身もその冒険によって感化され、彼と、彼の視点に寄り添うように語り手によって働きかけられてきた読者の側にも、世界の捉え方が変革されるという再創造が生じていることを明らかにする。

第2章は *The Lord of the Rings*(1954-55) を考察し、作者が別に創作していた神話物語 *The Silmarillion*(1977) から続く神話時代の終結が、墮神の力の源である指輪を破壊することでもたらされる様が、神話には登場しないホビット族の視点で描かれる点に注目し、読者に通ずる価値観を持つホビット Frodo を仲介にすることで、神話を読者にとって馴染み易い物語に再創造している点、またそうした再創造を通じて読者的に機能するホビット Sam が自身と神話のつながりに気付き、読者に受け継がれた神話が模範となることで、読者の日常の見方が再創造されている点を論じる。

第3章は創作に関する寓話とされる“Leaf by Niggle”(1945) を考察し、主人公の絵描きの絵のあり様が享受者の興味に応じて作り変えられている点、また絵を享受する経験が休息の機会として機能し享受者が日常の労苦に立ち向かう為の希望を再度与えている点、それら2種類の再創造が、物語論において作者が人間の創造行為を表現した「準創造」という言葉の本質である点を確認する。

第4章は“Smith of Wootton Major”(1967) を扱い、主人公の鍛冶屋の創造行為に、2種類の再創造を読み解くと共に、妖精国を旅する為の星という通行証を持ちながら、最終的に妖精国での旅を終え、自身の日常に帰還して星を次へ継承した主人公の帰還の意味を考察し、妖精国での旅に象徴される物語経験の究極的な目的が、日常の素晴らしさを再発見する再創造にある点を再確認する。

第5章では、世界の創造を扱った神話 *The Silmarillion* を論じ、絶対神 Eru が下書きした世界という物語を、下位の神々 Ainur が独自の歌に再創造することで世界の枠組みを創出していること、またエルフや人間族が、Ainur の歌に歌われた自らの運命を伝承等の自分達流の物語に落とし込んで理解し、その理解に基づく行動によって物語の内容を実現化させ、結果 Eru が意図した世界のあり方も再創造していることを確認し、時に人間族達の性質を利用した墮神 Melkor の嘘の物語によって悲劇的な形をとりながらも、物語の再創造が世界の再創造に直結する本作の特徴を明確にする。

本論文は、先行研究ではその重要性が看過されてきた再創造という問題が、トールキンの創作にとって中心的な主題であることを強い説得力とともに解明する優れた研究であり、本調査委員会は本論文の提出者が、博士（文学）の学位授与にふさわしいことを認める。